

医療・保健・福祉領域における 職業的アイデンティティに関する文献レビュー

桂 雅俊

(2022年9月26日受付, 2022年12月14日受理)

Literature Review on Professional Identity in the Medical, Health and Welfare Field

Masatoshi KATSURA

(Received : September 26, 2022, Accepted : December 14, 2022)

要 旨

医療・保健・福祉領域における各専門職の職業的アイデンティティに関する研究の動向, その結果および課題を明らかにすることを目的に, 文献レビューを実施した。結果として, 年代別の推移では, 国内外ともに2010年代以降から論文数が急増していた。国内論文においては, 最終的に49編が対象となり職種別では, 看護師が23編と最も報告数が多かった。また, 研究内容としては, 職業的アイデンティティ測定の尺度開発や構成要素およびプロセスを明らかにしたものが多くみられていた。今後は, 職場環境によるアイデンティティ・クライシスやゆらぎに着目し, 職場内での部署移動や違う職場への移動などに伴って職業的アイデンティティがどのように変容していくかを明らかにする研究が求められる。

キーワード：職業的アイデンティティ, 専門職アイデンティティ, 地域包括ケア, チームアプローチ

Abstract

A literature review was conducted to identify trends, results, and issues in research on the professional identities of various professionals in the medical, health, and welfare fields. As a result, the number of articles increased rapidly from the 2010s both domestically and internationally. The number of domestic papers was 49 in total, and nurses reported the highest number of papers 23 by occupation. Many of the studies focused on the development of scales and clarification of constructs and processes for measuring professional identity. Future research should focus on identity crises and fluctuations due to the work environment, and clarify how professional identity changes with departmental transfers within a workplace or transfers to a different workplace.

Key words : professional identity, occupational identity, vocational identity, community based integrated care system, team approach

I はじめに

1. 職業的アイデンティティに関する動向

超高齢社会を迎えた我が国において、医療・介護に対するニーズは多様性を増している。そこで国は、医療・介護・予防・住まい・生活支援などが包括的、継続的に提供される地域包括ケアシステムの構築を進めており、医師をはじめとする様々な専門職（看護師、保健師、社会福祉士、臨床心理士、介護福祉士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士など）は、これまで以上に有機的に連携をすることが求められている。そのためには、各専門職が自身の専門性をどのように捉えているのかを把握することは重要であると考えられる。

アイデンティティ（Identity：自己同一性）とは、アメリカの発達心理学者であるエリクソン（Erik H. Erikson）が、青年期の心理・社会的危機の主題として提唱した概念である（Erikson=2017）。「私はほかの誰とも違う存在であり、私は1人しかいない」という斉一性（sameness）と、「今までの私も、ずっと私であり、今の私も、これからの私もずっと私でありつづける」という連続性（continuity）の2つの感覚が基盤になっていると説明しており、青年期の発達課題のひとつとして職業的アイデンティティの確立にも触れている（Erikson=2011）。柴田（2004）も、青年期における職業選択やその模索が、アイデンティティの形成に関わっていると考えられるとしたうえで、アイデンティティの発達は青年期のみに見られるものではなく、人間の生涯を通じての課題であり、そこでも職業との関わりが重要な役割を果たしていると述べている。また、グレッグ（2000）は、職業的アイデンティティを確立することなしに、専門的看護実践を行うことは不可能であり、職業的アイデンティティの確立は、看護の専門職化にとって必要不可欠であると述べている。同様に、石倉（2021）も作業療法士としての高い専門性の確立を目指し、専門職化に不可欠とされる職業的アイデンティティに関する研究が求められるところであると述べている。

2. 研究の目的・意義

本研究は、医療・保健・福祉領域における各専門職の職業的アイデンティティに関する研究の動向、その結果および課題について先行文献をレビューし、明らかにすることを目的とする。

職業的アイデンティティのこれまでの動向を探ることで、各専門職が様々な職場環境や場面において自身の役割意識や専門性をどのように感じてきたのかが明らかになる。これは、超高齢社会の我が国で必要不可欠な多職種協働・連携を考えるうえで、各職種間での相互理解にもつながる意義の深いものになると考えられる。

3. 用語の定義

職業的アイデンティティの定義について、児玉・深田（2005）は、「職業人としての自分が独自で一貫しているという感覚、すなわち職業領域における自分らしさの感覚」と定義している。また、Adams（2006）は、「専門職集団の中で共有される態度、価値観、知識、信念、技能」と定義している。これらの先行研究を踏まえつつ本研究では、複数の先行研究を参考にして石倉（2021）の「自らの考えや信念に影響を与え、専門職固有の職業領域への適応感と、職業との自己一体認識、特定の専門家らしさの感覚」を定義とする。

なお、宮下（1984）は、職業的アイデンティティ（Occupational Identity, Vocational Identity）に対して、医師、看護婦、精神分析家などのように、その職に従事するための特定の教育を受け、一定の資格の獲得を必要とする専門職の場合を、専門家（職）アイデンティティ（Professional Identity）と呼んで区別することもあるとしている。しかし、先行研究を概観すると、混同されているものも非常に多いため、本稿では同義として扱うこととする。

以上のように用語の定義をしたうえで、先行研究からの直接引用に関しては、論理的に齟齬が生じない限り、引用元の表現をそのまま用いている。

II 研究方法

本稿では、国内外で出版された論文を対象とする。国外の論文は、アメリカ国立衛生研究所PubMedを用いて検索を実施した。キーワードは、「Professional Identity」, 「Occupational Identity」, 「Vocational Identity」とし、タイトルにこれらの用語が含まれているもの限定した。なお、国外論文については、論文数が多量になることが予測されたため、論文数の年次推移を示したうえで、研究動向を概観することとした。

国内の文献入手にあたっては、医学中央雑誌Web版（以下、医中誌）及び国立情報学研究所CiNii（以下、CiNii）のデータベースを用いた。なお、国内論文については、研究論文として背景・目的・方法・結果・考察が明確に示されていること及び内容を十分に把握できることを考慮し、医学中央雑誌Web版のデータベース使用時には絞り込み条件として、「原著論文」及び「総説」にて直接、本文の入手が可能なものを対象とした。CiNiiのデータベース使用時も、本文リンクがあるもののみを対象とした。そのうえで、検索期間の指定はせずにキーワードを、「職業」AND「アイデンティティ」, 「専門」AND「アイデンティティ」とし、タイトルにキーワードが含まれている条件にて検索を実施した。国内論文については、職種別に全体の研究の概要を示し動向を分析した。さらに、文献の内容を吟味したうえで、共通する主な論点を抽出し、カテゴリー毎にまとめて整理を行った。最後に、国内外の先行研究から得られた今後の研究課題について考察した。

III 結果

1. 国外における論文の年代別推移と研究動向

国外における職業的アイデンティティの論文数の年代別推移を表1に示す。

検索の結果、総数としては、「Professional Identity」が806編、「Occupational Identity」が38編、「Vocational Identity」が16編であった（2022年8月31日に検索）。年代別の推移をみると、Professional Identityの論文数は、1980年代より徐々に増加しはじめ、2010年代以降に急増している。Occupational Identity 及び Vocational Identityの論文数も2010年代以降に徐々に増加している。

ここからは、表1の結果より公表年の古いものから順に研究動向をみていく。

「Professional Identity」が使用されている最も古いものとしては、1957年に臨床心理士の専門性についての研究があった（Ekstein 1957）。

1960年代には、9編の論文があり、精神医学やホームケアといった領域での研究がみられていた。また、「Vocational Identity」が使用されている最も古い論文として、スクールカウンセラーの職業的アイデンティティに関するものが報告されていた（Rosen 1968）。

1970年代では、9編の論文があり、看護師や保育士の職業的アイデンティティの開発に関する論文がみられ、専門職毎での報告が目立ちはじめたことが分かる。

1980年代に入ると、論文数が22編と徐々に増加傾向がみられている。1985年には、作業療法士のアイデンティティを明確にするプロセスについ

表1 国外の職業的アイデンティティにおける論文数の推移

検索キーワード	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	2020年代	総数
Professional Identity	1	8	9	20	50	50	365	303	806
Occupational Identity	0	0	0	2	1	6	18	11	38
Vocational Identity	0	1	0	0	1	2	11	1	16
総数	1	9	9	22	52	58	394	315	860

※年数に関しては、各10年ごとの文献数を示す

※2022年8月31日検索

て、一元論的アプローチと多元的アプローチを詳細に記述し、多元的な職業的アイデンティティの利点を示している報告があった (Mosey 1985)。その他の多くは、看護師の役割や教育に関して、職業的アイデンティティの視点から捉えているものだった。また、「Occupational Identity」が使用されている最も古い論文として、Melgosa (1987) が、高校生および大学生417人を対象に、職業的アイデンティティ尺度の開発を行っていた。因子分析の結果として、4要因28項目からなる職業的アイデンティティ尺度が確立されていた。

1990年代に入ると、論文数は52編とさらに増えている。内容としては、看護師という職業の概念化のための理論的分析や半構造化インタビューを用いた質的な研究手法が取り入れられていた。また、Miles-Tapping (1992) は、カナダの理学療法士の職業的アイデンティティに関する自由記載形式のアンケート調査を実施している。結果として、多くの理学療法士が自分の技術や患者への利益を認識しているが、やりがいのある仕事に携わる医療専門職の一員であると認識しているのは15%であったとし、理学療法士は独立した専門職として多くの特徴を獲得しているが、個人的および専門的なレベルで力を持たない会員がいることが不満の声から明らかになったと報告している。

2000年代では、論文数は58編となっていた。Crawford (2007) は、英国の地域精神保健看護師が急速に変化する組織状況のなかで、自分たちの職業的地位を公共的な観点からどのように認識しているか、また、自分の労働生活をどのように理解しているかについて、34人を対象にインタビュー調査にて検討を行っている。結果として、①住民中心（専門職の公共サービスとしてのアイデンティティ）、②専門職ではない（懐疑、疑い、不安）、③役割からの成長（出口戦略としての専門職の育成）、④発見されるのを待っている（承認欲求）、という4つのテーマに分かれたと報告している。

2010年代に入ると論文数は、394編と急増していた。内容としては、より多領域への拡がりを見

せており、地域ケアにおける専門医の役割 (Bertin 2019) や薬学生の職業的アイデンティティに関する文献レビュー (Noble 2019) があった。また、Best (2019) は、専門職間チームで働く際に専門職としてのアイデンティティに影響を与える要因を明らかにすることを目的に、スコーピングレビューを実施している。結果として、「専門職のアイデンティティの創造」、「専門職のアイデンティティに対する挑戦と障壁」、「リーダーシップとマネジメントに対する影響」という3つの主要な関心領域が明らかになり、より実証的な研究を行うことが求められているとしている。Levanon-Erez (2017) は、ADHDの有無における職業的アイデンティティを比較し、その特徴をより深く理解することを試みている。結果として、定性的な内容分析では、①学業への参加の成功の意味、②学業への参加が成功しなかった場合の結果、③学業への参加が成功しなかったことの自己説明の3つの主要なテーマがみつかった。

2020年代では2022年現在において、論文数は315編となっており、さらに急増傾向を示している。Mak (2020) は、リハビリテーション専門職（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士）における職業的アイデンティティについてスコーピングレビューを実施し、職業固有の違いについて、さらなる経験的調査のギャップを指摘している。また、Walder (2022) は、作業療法における職業的アイデンティティについて、スコーピングレビューを実施し、専門職のアイデンティティとそれを維持・強化する要因についての理解を深めることは、変化する環境において、専門職がどのように自らを位置づけ、弾力的で適応的であり続けることができるかを明らかにするのに役立つとしている。その他、脳卒中の罹患後における職業的アイデンティティ混乱に関するシステムティックレビューでは、3段階のプロセスモデルとして、職業的アイデンティティの崩壊に関与する要因・崩壊の経験・個人の対処戦略が示されている (Martin-Saez 2021)。

2. 国内における論文の年代別推移

検索の結果、「職業」AND「アイデンティティ」では、医中誌Web版にて140件がヒットし、CiNiiでは256件がヒットした。「専門」AND「アイデンティティ」では、医中誌Web版にて14件がヒットし、CiNiiでは65件がヒットした（2022年8月3日に検索）。このうち、①重複している文献、②学生のみを対象としている文献、③内容が本稿の研究目的と関係ないと考えられるものを除外し、49編を今回の研究対象とした。なお、②学生のみを対象とした文献を除外した理由については、今回はすでに様々な職場で日常的に仕事として業務を行っている社会人の職業的アイデンティティについて調査を実施したかったためである。

まず、研究対象とした49編の論文の年代別推移を表2に示す。本邦において、「職業」AND「アイデンティティ」という言葉が原著論文および総説論文に限定のうでタイトルとして、初めて使用されたのは、グレッグ（2000）の総説論文だった。この中では、看護婦の職業的アイデンティティという概念の重要性を記述することを目的とし、理論、実践、および学問との関連を分析することにより吟味している。その後、徐々に論文数は増加し、2015年以降は急増していることが分かる。

一方、「専門」AND「アイデンティティ」という言葉がタイトルで初めて使用されたのは、広瀬（2018a）の原著論文だった。この中では、ホームヘルパーの専門職アイデンティティを測定する尺度を開発し、それに関連する要因について楽観的

態度から検討することを目的に、自記式郵送調査を行っていた。その後も複数の論文が公表されているが、本数としては「職業」AND「アイデンティティ」の方が多く結果だった。

3. 国内における各専門職での研究動向

ここからは、研究対象とした49編の論文について、各専門職に分けたうえで、研究動向を概観していく。まず、各職種での論文数としては、看護師（看護婦、訪問看護師含む）23編、作業療法士11編、保健師6編、ソーシャルワーカー2編、臨床心理士2編、ホームヘルパー2編、介護福祉士1編、助産師1編、養護教諭1編だった。次に、各職種別での、①発表年度、②タイトル、③著者（筆頭のみ記載）、④出典、⑤研究方法、⑥目的、⑦結果の概要を表3-1、3-2、3-3に示す。

1) 看護師を対象とした研究動向

看護師を対象とした研究では、上述したグレッグ（2000）の総説論文に始まり、23編と最も多く報告されている。この中で、文献レビューにて職業的アイデンティティを調査している論文は1編（原・後閑 2012）だった。結果として、89編の論文について整理を実施し、5つのカテゴリーに分けられている。

原・後閑（2012）の研究を参考に、今回の結果をカテゴリー化すると、最も多いものとして職業的アイデンティティとの関連要因に関するものが8編（関根・竹淵 2013；関根ら 2015；狩野 2015；吉村ら 2018；光岡 2019；福永ら 2019；塩見ら 2021；千葉ら 2022）だった。内容としては、職業継続・職場定着、感情労働、ストレスやバーンアウトといった観点から職業的アイデンティティとの関連を検討しているものが、2010年代後半より多く報告されていた。

つぎに、職業的アイデンティティの理論構築（概念化・構造化）に関するものが7編（山元ら 2003；竹淵ら 2013；内海ら 2016；畠中・遠藤 2016；三浦 2018a；三浦 2018b；廣瀬ら 2019）となっていた。

表2 国内の論文数の推移

検索キーワード	2000	2005	2010	2015	2020	総数
「職業」 AND 「アイデンティティ」	3	2	6	22	10	43
「専門」 AND 「アイデンティティ」	0	0	0	5	1	6
総数	3	2	6	27	11	49

※年数に関しては、各5年ごとの文献数を示す
※2022年8月3日検索

表3-1 各職種別での論文の概要①

No.	年度	タイトル	著者 (筆頭のみ)	出典	研究方法	目的	結果
看護師 (看護婦、訪問看護師含む)							
1	2022	看護学臨床実習指導者自己教育力尺度を用いた実習指導者の自己教育力とその関連要因-職業的アイデンティティ・バーンアウトを含む関連要因の検討-	千葉 今日子	埼玉医科大学看護学雑誌 15巻1号 11-19	質問紙調査	看護学臨床実習指導者自己教育力尺度を用いて、指導者の自己教育力と職業的アイデンティティおよびバーンアウトを含む関連要因を明らかにすること。	重回帰分析の結果、指導者の自己教育力に最も強く関連していた変数は、看護師の職業的アイデンティティであった。これは、指導者が学生に看護を意味づける上で、実習教育の質を左右する重要(安藤,2015)な要因であり、指導者の自己教育力の高さと強く関連していたことが明らかになった。
2	2022	医療専門職の職業的アイデンティティ尺度の測定項目の選定および内容的・表面的妥当性の検討	小池 康弘	岡山県立大学保健福祉学部紀要 28巻 137-145	文献レビュー・アンケート調査	医療専門職の職業的アイデンティティを共通して測定することの出来る尺度を開発するにあたり、尺度の測定項目を選定し、その内容的妥当性と表面的妥当性を検証すること。	医療専門職の職業的アイデンティティは「職業への持帰」と「職業と自己の同一性」の2つの構成概念で解釈することが出来、合計44項目の職業的アイデンティティ尺度の測定項目が完成した。本尺度は高い妥当性を有しており、さらに内容的、表面的妥当性も有している。
3	2021	大病院の看護師の職業的アイデンティティとバーンアウト	塩見 直子	日本健康学会雑誌 30巻 2号 205-217	質問紙調査	大病院の看護師のバーンアウト予防を意図し、職業的アイデンティティとバーンアウトの関連および職業的アイデンティティの高い者の特徴を明らかにすること。	重回帰分析の結果、「職業的アイデンティティ」とMBI-HSSの総合得点との関連が認められ、職業的アイデンティティが高い者は、バーンアウトしにくいことが明らかになった。
4	2019	職業性ストレスと職業的アイデンティティの関連-看護教員を対象とした質問紙調査結果から-	福永 ひとみ	心身健康科学 15巻2号 82-93	質問紙調査	転職者の職業性ストレスと職業的アイデンティティの関連について、新たな実証的知見を得ること。	回答者の職業的アイデンティティは、「看護教員としての自分に対する満足」と「看護職または看護教員としての自分に対する肯定」の2軸から構成された。これらの成分から分類した4層間で職業性ストレスとの関連を検証した結果、「看護職または看護教員としての自分に対する肯定」に比べ、「看護教員としての自分に対する満足」の程度の寄与率が高く、より職業性ストレスと関連していた。
5	2019	病児保育における看護師の専門職アイデンティティに関する体験	廣瀬 春次	至誠館大学研究紀要 6巻 15-26	インタビュー調査	病児保育室の看護師に着任前後から今までの体験についてインタビューし、病児保育の専門職として自己を確立することに関わるプロセスを明らかにすること。	A看護師からは、カテゴリーとして「自分が選択したわけではない職」「子育て支援までを行う余裕はない」「保育士との温度差の拡大」「保育についても専門家であることの葛藤」「子どもと関わってみたい」にまとめられた。B看護師からは、「職場環境の大きな変化を認識」「病児保育に習熟する」「病児保育の看護師には高い見知が求められる」「病児保育のやりがいは母親や子供との関わり」「病児だけでなくトータルケア」「保育士とは違う関係」「責任と寂しさにまとめられた。
6	2019	看護師における本来感と感情労働と職業的アイデンティティとの関連	光岡 由紀子	日本看護研究学会雑誌 42巻4号 749-761	質問紙調査	看護師の本来感、感情労働、職業的アイデンティティの関連を明らかにすること。	「表層演技に伴う感情労働」は「職業的アイデンティティ」に負の影響を及ぼしていた。「深層演技に伴う感情労働」は「職業的アイデンティティ」に最も影響を及ぼしていた。「本来感」は「職業的アイデンティティ」と「深層演技に伴う感情労働」に影響を及ぼしていた。
7	2018b	青森県の精神科病棟に勤務する看護師の職業的アイデンティティの実態	三浦 広美	八戸学院大学紀要 57号 163-171	質問紙調査	青森県内の精神科病棟に勤務する看護師の基本的属性と職業的アイデンティティの実態を把握すること。	精神科経験年数では「6年以上10年未満」が最も多く、日本看護協会の2017年看護職員実態調査報告と比較して「平均年齢」「男性看護師」「既婚」「子どもあり」「准看護師」「准看護養成所を最終学歴としている」の割合が高かった。職業的アイデンティティ尺度得点は「既婚」「子どもあり」の看護師が有意に高かった。
8	2018a	総合病院の精神科病棟に勤務する看護師の職業的アイデンティティに関する研究	三浦 広美	八戸学院大学紀要 57号 129-142	質問紙調査	総合病院精神科看護師の職業的IDと、職場への適応感として精神科看護の否定的体験と精神科看護の魅力、職務満足度との関連性を明らかにし、単科精神科病院看護師と比較検討することにより、総合病院精神科看護師の特性と職業的IDの特徴を考察すること。	総合病院精神科看護師は単科精神科看護師と比較して「男性看護師」「50歳代」「子どもあり」の割合が有意に高かった。総合病院精神科看護師の職業的アイデンティティ得点は基本的属性と関連がなかった。職業的アイデンティティは「精神科看護の否定的体験」「精神科看護の魅力」「職業満足度」と関連していた。
9	2018	女性看護師における働きやすさ-職業的アイデンティティと職業継続・職場定着意思の関係	吉村 千草	日本医療・病院管理学会誌 55巻4号 173-183	質問紙調査	女性看護師が捉える働きやすさと職業的アイデンティティを把握、及びそれらと職業継続意思・職場定着意思との関係を明らかにすること。	働きやすさ第1因子の寄与率が約5割であり、働きやすさを上司に対する評価と捉えていた。職業的アイデンティティは、平均値が3.7以上の項目から、経済的基盤と人間的に成長できると捉えていた。働きやすさと職場定着意思、職業的アイデンティティと職場定着意思・職業継続意思は、やや強い正の相関があった。
10	2018	看護師としての職業的アイデンティティを育むための現任教育プログラムの開発	畑中 純子	岩手県立大学看護学部紀要 20巻 1-18	質問紙調査	看護師としての職業的アイデンティティを育むための、現任教育プログラムを開発すること。	教育プログラムの実施により、看護師の職業的アイデンティティ尺度得点及び看護観に関する4項目全ての得点が有意に上昇し、教育プログラムが看護観を醸成させ、職業的アイデンティティを高めたことが示唆された。また、看護観に関する4項目の得点と看護師の職業的アイデンティティ尺度得点には正の相関があり、看護観の醸成により看護師の職業的アイデンティティが高められることが確認できた。
11	2017	訪問看護師の職業的アイデンティティ尺度開発の試みと信頼性・妥当性の検討	内海 恵子	香川大学看護学雑誌 21巻 1号 41-54	質問紙調査	訪問看護師の職業的アイデンティティを測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行うこと。	因子分析の結果、訪問看護師の職業的アイデンティティの構成要素として6因子を抽出した。訪問看護師の職業的アイデンティティは「自身の訪問看護観」、「自分らしさを活かした援助関係形成技術」、「主体的な看護実践」、「訪問看護師としての自負」、「職業への肯定的な認識」、「利用者の尊厳の尊重」から構成される。6因子は各々7項目から3項目で構成され、合計28項目から成る。信頼性・妥当性の確認を行ったところ、項目分析、G-P分析、I-T分析および内容的妥当性の検討と基準関連妥当性の検討からこの28項目はある程度の信頼性と妥当性を有することを確認した。
12	2016	グループインタビューを用いた訪問看護師の職業的アイデンティティの構成要素抽出の試み	内海 恵子	香川大学看護学雑誌 20巻 1号 39-49	インタビュー調査	訪問看護師の職業的アイデンティティの構成要素を明らかにすること。	訪問看護師の職業的アイデンティティの11の構成要素が明らかになった。各構成要素は【利用者の思いをかえするための信頼関係の形成】、【主体的な看護実践】、【利用者や家族への安心の提供】、【家族が後悔しない看取りの支援】、【巧みな会話の駆使】、【利用者の変化を予測できるフィジカルアセスメント力】、【多職種連携による相乗効果を意識した調整】、【訪問看護師としての成長】、【職務への責任感】、【訪問看護技術を高めるための学習ニーズ】、【訪問看護師として社会から必要とされる存在】である。
13	2016	看護実践能力と職業的アイデンティティの関連から見る中堅看護師の実態	畠中 易子	滋賀医科大学看護学ジャーナル 14巻1号 13-17	質問紙調査	中堅看護師の看護実践能力が職業的アイデンティティに影響しているかを明らかにすること。	看護実践の卓越性尺度の総得点と職業的アイデンティティ尺度の間で正の相関が見られ(r=.597)、中堅看護師の看護実践能力が職業的アイデンティティに影響していた。看護実践の卓越性尺度の下位尺度と職業的アイデンティティ尺度において、全ての下位尺度で正の相関がみられた。
14	2015	看護師における職業的アイデンティティ、職業経験の質と職業キャリア成熟の関係	狩野 京子	日本看護研究学会誌 5巻1号 1-10	質問紙調査	看護師の人口学的特性ならびに個人特性と職業キャリア成熟の関連性を明らかにすること。	職業的アイデンティティが職業キャリア成熟に強く影響し、また職業的アイデンティティには職業経験の質が強く影響していることが明らかになった。
15	2015	精神科看護師の職業的アイデンティティへの影響要因-他科看護師との比較から-	関根 正	日本精神保健看護学会誌 24巻1号 75-82	質問紙調査	先行研究を踏まえ、個人属性、仕事の満足度、仕事の自律性を影響要因として設定し、精神科看護師の職業的アイデンティティへの影響要因を明らかにすること。	精神科看護師の職業的アイデンティティへの影響要因は、職業的地位、実践能力、認知能力、自主的判断力であることが示された。また、他科看護師との違いは、認知能力が影響要因で、抽象的判断能力が影響要因ではなかったことである。
16	2015	看護管理者の職業的アイデンティティ確立プロセス	鈴記 洋子	The Journal of Nursing Investigation 13巻1-2号 1-11	インタビュー調査	中間管理者である師長の職業的アイデンティティは、どのように確立されていくかを明らかにすること。	師長が職業的アイデンティティを確立する経験を表す12概念が抽出された。12の概念から師長の職業的アイデンティティ確立プロセスは、師長昇任当初の戸惑いを経て、1年間に師長役割を認識し、役割を遂行する中で、支援を受けながら、師長役割を理解し、日々の出来事を内省することで、自己成長し、他者からの承認を得ることで、アイデンティティを確立していた。

表3-2 各職種別での論文の概要②

No.	年度	タイトル	著者 (筆頭のみ)	出典	研究方法	目的	結果
看護師（看護婦、訪問看護師含む）							
17	2013	A限の精神科看護職者の職業的アイデンティティの実態	竹淵 由恵	群馬県立県民健康科学大学 紀要 8巻 81-88	質問紙調査	A限内の精神科病院に勤務する看護職者の基本的属性と職業的アイデンティティの実態を把握すること。	A限内の精神科病院に勤務する看護職者は、男性看護師、准看護師、大学と短期大学を最終学歴としている割合が高く、看護職としての経験年数が長いことが明らかとなった。また、基本的属性と職業的ID得点には有意差は認められなかった。
18	2013	児童心療科病棟に勤務する看護師の職業的アイデンティティに関する研究	関根 正	群馬県立県民健康科学大学 紀要 8巻 65-79	郵送調査	児童精神科看護師の職業的IDと影響因子を明らかにし、精神科看護師との比較から職業的IDの特徴を検討すること。	児童精神科看護師の職業的IDの特徴について、1. 職務満足度尺度の低位尺度の職業的地位と看護管理は、児童精神科看護師の方が有意に高い。2. 児童精神科看護師の方が、職業的地位と看護管理における満足度が高い。3. PISN得点は児童精神科看護師の方が有意に高い。4. 児童精神科看護師の方が職業的IDが高い。5. 児童精神科看護師の職業的IDへの影響因子は、職務満足度尺度の低位尺度の職業的地位と自律性測定尺度の低位尺度である実践能力であり、職業的地位が最も影響を与えていた。
19	2012	看護における職業的アイデンティティに関する研究の動向と課題	原 頼子	岐阜看護研究 会誌 4号 49-57	文献レビュー	看護における職業的アイデンティティに関する研究の動向と、今後の課題を見いだすこと。	要件を満たした89件を抽出し、「理論構築」、「尺度開発」、「発達過程」、「関連要因」、「職業的アイデンティティ確立に向けての方策」にカテゴリ化することができた。その結果、理論的枠組み、開発された尺度の特徴、看護学生・看護職の発達過程、職業的アイデンティティに影響を及ぼす要因について把握することができた。また、さらなる理論構築の発展や因子構造の解明、時代に対応した尺度開発の必要性、職業的アイデンティティ形成を促進させるための方策などに関する新たな知見の蓄積が必要であることが示唆された。
20	2008	新卒看護師の職業的アイデンティティ形成と職務態度 縦断的研究に基づく検討	竹内 久美子	目白大学健康科学研究 1号 101-109	質問紙調査	看護師の入职後5年間の職業的アイデンティティ形成および入职5年目の看護職者の職業的アイデンティティ・ステータスにおける職務態度(仕事の質の向上行動、職務関与)への影響を、実証的に明らかにすること。	入职後の職業的アイデンティティ形成は、入职1年目から2年目にかけて拡散が高まり、達成が低下し、その後入职5年目に傾向に変化することが明らかとなった。また、5年目の職業的アイデンティティ・ステータスは、仕事の質の向上行動および職務関与に影響を及ぼしており、拡散の高まりがいずれの態度変数にも負の影響を及ぼしていた。
21	2006	看護師の職業的アイデンティティ尺度 (PISN)の開発	佐々木 真紀子	日本看護科学 会誌 26巻1号 34-41	質問紙調査	看護師の職業的アイデンティティを測定する尺度(Professional Identity Scale for Nurses:以下PISN)を作成し、その信頼性と妥当性を検討すること。	Cronbachの α は0.84、主成分分析では20項目が第1因子に所属し、尺度の信頼性と一次元性が確認された。また既存の尺度であるRasmussenの自己同一性尺度、Self-Esteem Scale、適応意識とは有意に正の相関が確認された。対象者の背景では、役割にあるものがないものよりPISN得点が高い傾向にあり、職業的アイデンティティに関する先行研究と同様の傾向を示した。これらのことからPISNの内容妥当性が一部確認された。
22	2003	看護領域の違いによる職業的アイデンティティの差異の検討 -一般病院とリハビリテーション専門病棟の看護師の比較-	山元 由美子	茨城県立医療大学紀要 8巻 89-98	質問紙調査	看護職としての自分の生き方、あり方に影響した出来事とその経験をした時期を比較することで、リハ看護の方が一般看護より、「患者に必要とされる存在の認知」が低くなる原因を探ること。	リハ看護は「初心者」や「中堅」のレベルの看護職の割合が高い。配置転換が多い。「出来事」の体験年齢が高く、ネガティブな体験が多かった。一般看護は「一人前」のレベルの看護職の割合が高く、体験も比較的肯定的で、先輩モデルが存在した。
23	2000	看護における1重要概念としての看護婦の職業的アイデンティティ	グレッグ 美鈴	Quality Nursing 6巻 10号 873-878	概念分析	看護婦の職業的アイデンティティという概念の重要性を記述すること。	職業的アイデンティティに関する知識は、看護婦が実践するために直接必要な知識ではない。しかしこれは、看護婦が専門看護婦となるために必要な基礎的知識であると言える。職業的アイデンティティは、心理学や社会学など他の学問領域でも研究されているが、看護学の中に知識を集積するために、看護の視点を用いて看護婦によって研究されるべきである。
作業療法士							
1	2022	医療観察病棟で勤務する作業療法士が職業的アイデンティティを形成するプロセス	南 正一郎	作業療法 41巻1号 21-30	修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ	医療観察病棟で勤務する作業療法士が職業的アイデンティティを形成するプロセスを明らかにすること。	【あいまいに形成された作業療法士としての自分らしさ】を抱いた研究参加者は、医療観察病棟における多職種連携の中で【作業療法士としての自分らしさの危機】を経験していた。しかし、その後の【作業療法士としての自分らしさの再確立に向けた取り組み】によって【作業療法士特有の関わり】を可能にし、【作業療法士としての自己効力感の高まり】を感じるに至っていた。今後は【職業的アイデンティティの更なる形成に向けた方策】への取り組みが重要と考えられた。
2	2021	作業療法士の職業的アイデンティティ尺度の探索的研究 -デルファII法を用いて-	田村 勇樹	作業療法 40巻5号 562-571	デルファII法による同意度調査・記述式調査	内容的妥当性のある作業療法士の職業的アイデンティティ尺度項目の作成とその特徴を考察すること。	記述式調査から13項目を作成し、同意度調査で11項目が削除され、27の内容的妥当性のある尺度項目案を得た。コンセンサスが形成された項目案の傾向から、対象者の存在がOTのPIDに大きく影響を及ぼす可能性が示唆された。今後は更なる検討を行い、尺度を完成させることが課題である。
3	2021	日本における医療職の職業的アイデンティティ尺度開発のための研究の動向と課題	石倉 健一	日本作業療法研究学会雑誌 24巻1号 39-46	文献レビュー	作業療法士用の職業的アイデンティティ尺度を開発するため、尺度開発に関連する先行研究を概観し基礎的資料を得ること。	医学中央雑誌Web版およびCINAHLを用いて、看護師・保健師・助産師・作業療法士・理学療法士・言語聴覚士の職業的アイデンティティ尺度開発に関連する文献検索を行い、要件を満たした10件を対象とした。結果として、看護師7件、保健師1件、助産師1件、作業療法士1件が抽出された。各尺度を構成する共通因子として、「肯定的イメージ」、「自己尊重」、「自尊感情・自信」、「職業選択」、「患者・社会貢献」、「自負」、「専門職観」、「臨床実践」、「適応感」があげられた。
4	2020	作業療法士の職業的アイデンティティ測定尺度開発の試み	石倉 健一	日本作業療法研究学会雑誌 23巻1号 1-8	インタビュー調査・アンケート調査	作業療法士の専門性や領域に向けた課題を検証するため、作業療法士の職務特性を反映した職業的アイデンティティ測定尺度を開発すること。	「医療専門職としての職業観」、「多職種連携への貢献」、「組織・後輩・養成教育・専門職集団の発展と貢献」、「専門職としての実践的スキル」から構成される4因子24項目からなる作業療法士用職業的アイデンティティ尺度が開発された。
5	2019	作業に焦点を当てた作業療法自己効力感尺度開発に向けた文献レビュー -職業的アイデンティティと自己効力感に影響する要因-	青山 克夷	作業行動研究 23巻2号 52-60	文献レビュー	職業的アイデンティティと自己効力感に影響する要因を文献で探索し、作業に焦点を当てた作業療法自己効力感尺度開発の必要性を検討すること。	職業的アイデンティティに影響する因子については、「危機」、「(再)体制化」、「再生」の категорияに分けられた。自己効力感に影響する要因としては、「予想」、「選択」、「経験」、「解釈」に分けることができた。
6	2019	精神科領域に従事する若年層作業療法士の職業的アイデンティティ形成に影響を与える因子の検討	吉田 裕紀	作業療法 38巻5号 532-540	アンケート調査	若年層作業療法士の職業的アイデンティティに影響を与える因子を明らかにし、職業的アイデンティティ形成にとって必要な支援を提言すること。	年齢、臨床経験年数と、職業的アイデンティティ得点間に弱い相関が認められ、後輩指導経験の有無、取り扱い件数目標の有無、多職種カンファレンスへの参加の有無による、職業的アイデンティティ得点に有意差が認められた。また、重回帰分析では、臨床経験年数、取り扱い件数目標の有無、多職種カンファレンスへの参加の有無の3因子に対する影響が示唆された。
7	2019	作業療法士の職業的アイデンティティ自己評価尺度における項目特性と構造的妥当性 -若手作業療法士を対象にした検討-	鈴木 渉	作業療法 38巻4号 450-459	アンケート調査	「作業療法士の職業的アイデンティティに関する質問紙」を身体障害者領域および高齢者領域における作業療法士の職業的アイデンティティを測定する尺度として改訂し、その項目特性や構造的妥当性を検証すること。	職業的アイデンティティ尺度は、作業療法士に自覚性があると程度が平均的な回答者に対する測定精度が高く、4因子29項目の2次元モデルで適合していたことから、身体障害者領域および高齢者領域の作業療法士を対象として、広く使用できる尺度であることが明らかとなった。
8	2018	精神科作業療法士の職業的アイデンティティ形成に関連する重要因子について	吉田 裕紀	日本臨床作業療法研究 5巻1号 1-7	インタビュー調査	熟練者にインタビューを行い、職業的アイデンティティ形成のプロセスを明らかにした上で、職業的アイデンティティ形成に関連する重要因子を明らかにすること。	熟練者の職業的アイデンティティ形成プロセスは危機-再体制化-再生のプロセスを経て【題の成長プロセス】、【他職種理解を得るプロセス】、【診療報酬制度の課題対応プロセス】、【部署の成長プロセス】、【上司・先輩からの支援】の5カテゴリーにより形成されていた。また、危機-再体制化-再生のプロセスから、「再体制化」を抽出した。その結果、《克服のための行動》、《他職種の作業療法理解促進のための行動》、《診療報酬制度から生じる課題への対応》、《部署課題への対応》、《環境の調整》、《経験の継承》の計6サブカテゴリー、26概念が職業的アイデンティティ形成に関連する重要因子として抽出された。
9	2018	作業療法士における職業的アイデンティティとキャリア・アダプタビリティの関係	石倉 健一	日本作業療法研究学会雑誌 21巻1号 11-16	質問紙調査	作業療法士における職業的アイデンティティとキャリア・アダプタビリティの関係を検討し、作業療法士という医療専門職集団の職業的発達を支援するための基礎的資料を得ること。	両因子間に有意な正の相関が示され、重回帰分析の結果、職業的アイデンティティの医療職観の確立は、すべてのキャリア・アダプタビリティを高めることが示された。
10	2018	回復期リハビリテーション病棟で働く作業療法士の職業的アイデンティティの分析	中本 久之	総合リハビリテーション 46巻7号 657-665	アンケート調査	回復期リハビリテーション病棟で働く作業療法士の職業的アイデンティティの現状とその特性を明らかにすること。	職業的アイデンティティは自己効力感と回復期リハビリテーション病棟の経験年数、職場環境と相関を示した。また、女性が男性より職業的アイデンティティが低いことが明らかとなった。
11	2001	作業療法士の職業的アイデンティティ研究の展望	長谷 龍太郎	茨城県立医療大学紀要 6巻 47-56	文献調査	作業療法士の職業的アイデンティティとその危機の構造について考察し、職業的アイデンティティについての研究上の展望について述べることを。	作業療法が道徳法の影響を受けながら、根本的理論と技術療育の両面に厳格科学的方法論を応用させていることから、還元主義的な作業療法が生じたことを作業療法が専門職アイデンティティの生成に関与するパラダイム理論で分析した。そして、米国における還元主義の行き詰まりから専門職アイデンティティが還元主義的なパラダイムから新たなパラダイムに移行することを確認した。

表3-3 各職種別での論文の概要③

No.	年度	タイトル	著者 (筆頭のみ)	出典	研究方法	目的	結果
保健師							
1	2021	地域包括支援センターで働く保健師の職業的アイデンティティに関する文献レビュー	小路 浩子	神戸女子大学看護学部紀要 6巻 1-6	文献レビュー	地域包括支援センター保健師の役割意識や専門性への認識等に関する文献レビューを行い、地域包括保健師が認識している職業的アイデンティティとその形成に影響を与える要因を探索し、職業的ID向上に向けた示唆を得ること。	職業的IDに関する記述として、医療専門職としての役割意識と公衆衛生看護の専門職としての役割意識、3職種でのチームとしての活動を重視する行動、住民と顔が見える関係を重視し個へのケアを地域づくりへとつなげる専門性の認識等が示されていた。職業的IDの形成に影響を与えたと考えられる要因として、委託型であることの活動の困難さや現行教育体制の不整備等が示されていた。
2	2020	市町村保健師の職業的アイデンティティの形成プロセスに影響要因—複線経路等至性モデリング(TEM)による4類型からみた特徴—	小路 浩子	日本地域看護学会誌 23巻 2号 12-20	半構成的面接 質的記述的研究	複線経路等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling;TEM)を用いて、市町村保健師の職業的アイデンティティ(以下、職業的ID)の形成プロセスと影響要因を明らかにすること。	保健師の職業経験のプロセスを「保健師の選択的機」「ロールモデルとの出会い」「個から集団・地域へ」として活動を進めさせることに焦点を当て、経路の類似点・相違点を比較検討した結果、I型(積極的選択活動発展型)、II型(積極的選択活動発展型)、III型(消極的選択活動発展型)、IV型(消極的選択活動発展型)の4タイプに類型化された。I型、II型はロールモデルと出会い、個から集団・地域へと活動を進めさせた経験が転換点となり、職業的IDを認識していた。III型は新たな制度構築という役割の遂行を経て職業的IDを認識していた。IV型は日常業務に追われ、地区活動の経験が乏しく、職業的IDの揺らぎを感じていた。
3	2018	市町村保健師の経験のプロセスからみた職業的アイデンティティ形成の影響要因—熟練保健師の経験の語りから—	小路 浩子	神戸女子大学看護学部紀要 3巻 55-64	半構成的面接 質的帰納的	高い職業意識を保持していた保健師の経験の語りを分析することにより、市町村保健師の経験のプロセスをとおして職業的アイデンティティの形成に影響を与えたと示唆すること。	乏しいマンパワーと脆弱な活動体制の中で、保健師をロールモデルとして活動基盤を形成していった市町村保健師の経験のプロセスが明らかとなった。ロールモデルがあること、保健師活動を期待された環境等が職業的アイデンティティの形成に影響を与えていた。
4	2017	行政機関に勤務する新任保健師の職業的アイデンティティの構成要素	金藤 垂希子	広島大学保健ジャーナル 14巻 1-10	質的記述的分析	新任保健師の保健活動の体験に基づく内容から職業的アイデンティティの構成要素を明らかにすること。	新任保健師の職業的アイデンティティの構成要素として【力量不足の自覚】、【役割遂行への責任感】、【他者からの評価による存在価値の確信】、【活動の振り返りから得た自信】、【職業への誇り】、【目標のある自己認識】の6つのカテゴリを得た。
5	2013	新任保健師の職業的アイデンティティに関連する要因—縦断的研究に基づく検討—	太田 鏡子	保健医療技術学部論集 7号 41-49	質問紙調査	新任期から3年間における保健師の職業的アイデンティティとそれに関連する要因を明らかにすること。	3年間の「職業的アイデンティティ」の変化には差はみられなかった。1年目では、「指導者なし」が役割意識を高め、2年目では、「指導者なし」が「職業的アイデンティティ」を高めていた。また、「保健師モデルの有無」は、2年目以降の「職業的アイデンティティ」と関連がみられ、理想の保健師像が明確である者は、「職業的アイデンティティ」が高くなるが、逆に「保健師モデル」が得られない者は、「職業的アイデンティティ」が低くなること示唆された。
6	2010	「行政保健師の職業的アイデンティティ尺度」の開発と関連要因の検討	根岸 重	日本公衆衛生雑誌 57巻1号 27-38	質問紙調査	「行政保健師の職業的アイデンティティ尺度」を開発すると共にそれに関連する要因を明らかにし、効果的な保健師活動のための基礎資料とすること。	1)7つの下位概念と52項目の暫定版行政保健師の職業的アイデンティティ尺度(PISP)を作成した。この尺度の項目分析と因子分析(プロマックス斜交回転法)の結果、PISPは、「保健師としての自信」、「職業と自己の生活の同一化」、「他者からの評価と自己尊重」、「職業への適応と確信」、「職業と人生の一体化」の5因子構造の37項目からなる尺度となった。2)PISPの合計得点と「自我同一性尺度」、「自尊感情尺度」とは有意な正の相関がみられた。3)PISPと「看護職の職業的アイデンティティ尺度」の合計得点との関連では、有意な正の相関がみられた。4)PISP全体のα係数は、0.96と高かった。5)PISPの合計得点と年齢および経験年数の関連では共に有意な正の相関がみられた。6)PISPの合計得点との関連では、配偶者の有無、同居者の有無、夫・子供と同居している群、役職の有無の得点が無群と比べ有意に高かった。7)PISPおよび下位尺度の合計得点を従属変数とし、前提要因と関連要因を独立変数とした重回帰分析の結果、PISPの合計得点に有意に関連していたのは、信念をもっている、モチベーションをもっている、年齢が高い、保健師としての役割を担っているであった。
ソーシャルワーカー							
1	2022	ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ尺度開発—バーンアウト、職業コミットメント、職務満足、離職意識との関連—	大谷 京子	精神保健福祉 52巻3号 168-178	質問紙調査	ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ尺度を開発し、バーンアウト、職業コミットメント、職務満足、離職意識との関連を明らかにすること。	バーンアウトとは負の相関があり、職業コミットメントとは正の相関があった。職務満足とは正の相関、離職意識とは負の相関があった。
2	2022	スーパーバイザー経験がソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ形成に与える影響—初めての職場外スーパーバイジョンの場面から—	田中 京	実作大学・実作大学短期大学部紀要 67巻 43-51	半構成的面接	初めての職場外スーパーバイジョンにおけるスーパーバイザー経験がソーシャルワーカーの専門職アイデンティティの形成にどのような影響を与えるかを検討すること。	①実践分野の相違を有効活用した新しい知識の獲得、②バイザーアイデンティティの形成過程で生じるゆらぎの体験、③反省的実践家への自己の移行の3点が専門職アイデンティティ形成に影響を与えていたことが明らかとなった。
臨床心理士							
1	2021	臨床心理士は自身の職業的アイデンティティと専門性をどのように捉えているのか	近藤 孝司	上越教育大学研究紀要 40巻2号 537-546	郵送調査(自由記述)	大規模サンプルを用いて心理職自身が自覚しているアイデンティティ像を明らかにし、デモグラフィック要因との関連を検討すること。	585個の文章データに切片化され、類似性をもってカテゴリ化したところ、20のサブカテゴリと5のカテゴリが生み出された。最も多かったのが「CIとの関わり方」であり、他に「集団における臨床心理士」「臨床実践上の困難・課題」「臨床実践で得られるもの」「臨床心理士に必要な個人的要素」が抽出された。デモグラフィック要因との関連では、少ないながらも臨床経験年数において一定の関連性が示され、経験を蓄積していくと専門性が深化していくことが示された。
2	2016	臨床心理士の専門職アイデンティティとその関連要因	元木 未知子	上智大学心理学年報 40巻 73-80	アンケート調査	独自に作成した臨床心理士の専門職アイデンティティを測定する尺度を用いて、他職種を対象としたこれまでの研究において専門職アイデンティティの形成を確立したとの関連が指摘されている要因、すなわち経験年数、理想とその人物の有無、特に関心のある専門領域、業務への自信と意欲との関連について検討すること。	就業初期においてその独自性や専門性を見いだすに困難であり、しかも単に経験年数を重ねていくだけでは専門職アイデンティティを確立していくことが困難である。しかし、そうした中でも、理想とする人物を持ち、その人物に同一化して学び取ることや自己責任を重んじた結果業務に対する自信を獲得することで、専門職としてのアイデンティティが確立されていくことも示唆された。
ホームヘルパー							
1	2018b	ホームヘルパーの専門職アイデンティティとネグレクト支援との関連性—構造方程式モデリングを用いて—	広瀬 未千代	総合福祉学 研究 9号 21-30	自記式郵送調査	「ホームヘルパーが家族介護者による不適切な介護に対して働きかける支援」を「ホームヘルパーのネグレクト支援」と定義し、その構造を確認し、それに関連する要因として、ホームヘルパーの専門職としてのアイデンティティから検討すること。	欠損のない101人のデータを用いて、「ホームヘルパーのネグレクト支援」に対して確定的因子分析を実施した結果、統計学的な水準を満たしていた。本尺度は11因子で構成され、構成概念妥当性が支持された。また、「ホームヘルパーのネグレクト支援」は、「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」($\beta=0.279, p<0.01$)、「管理職の経験」($\beta=0.293, p<0.01$)と有意な関連が見られた。
2	2018a	「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」の構造とその関連要因—業観的な態度からの検討—	広瀬 未千代	老年社会学 39巻4号 403-413	自記式郵送調査	「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」を測定する尺度を開発し、それに関連する要因について業観的態度から検討すること。	本尺度は確定的因子分析の結果、妥当性が確認された。また、「ヘルパー業務客観的態度」と「ホームヘルパーの専門職アイデンティティ」の関連では、業観的態度のうち「自己成長感」、「困難の業観的解釈」に有意な関連がみられた。
介護福祉士							
1	2018	主体的に学ぶ介護福祉士の職業的アイデンティティ形成過程に関する研究	渡邊 泰夫	四天王寺大学大学院研究論集 12号 151-163	インタビュー調査・修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ	主体的に学ぶ介護福祉士の職業的アイデンティティ形成過程を明らかにすること。	主体的に学ぶ介護福祉士の職業的アイデンティティ形成過程は、「省察の深化に伴う葛藤」「如何に自分で勉強するか」「介護福祉研究を介した“やればできる感覚”の高まり」「職業的アイデンティティの探求」(社会福祉実践者という職業的アイデンティティへの帰結)という5カテゴリから構成された。
助産師							
1	2011	助産師の職業的アイデンティティに関連する要因	佐藤 美春	日本助産学雑誌 25巻2号 171-180	質問紙調査	助産師の職業的アイデンティティを測定する尺度を作成し、関連要因を検討すること。	助産師の職業的アイデンティティ尺度5因子26項目を作成した。その下5因子にはそれぞれ、F1「助産師として必要とされることへの自覚」、F2「自己の助産師職の確立」、F3「助産師選択への自信」、F4「助産師の専門性への自覚」、F5「助産師としての社会貢献への志向」と命名した。助産師の職業的アイデンティティ下位尺度への関連要因は、助産師学生時代の肯定的感情を伴う体験、教師からの精神的支援、就職後の肯定的・否定的感情を伴う体験、学生時代と就職後の仕事認識のギャップ、将来展望、分娩助産師数、先輩助産師からの精神的支援、役割モデルの有無であった。職業継続意欲への関連要因は、F3「助産師選択への自信」、就職後の否定的感情を伴う体験、将来展望、性別態度であった。
養護教諭							
1	2019	養護教諭の職業的アイデンティティに関連する要因	波多 幸江	学校保健研究 61巻5号 258-275	質問紙調査	養護教諭の職業的アイデンティティ尺度を使用し、養護教諭の職業的アイデンティティの関連要因について検討すること。	養護教諭の職業的アイデンティティと「養護教諭の知識・技術」、「仕事に対する充実感・満足感」、「職場における差別感・孤独感」との関連が示唆された。また、進路決定時期、進路決定プロセスとの関連から養護教諭においても、より早い時期に自分の意思で職業選択することが養護教諭の職業的アイデンティティの形成・発達につながることが示唆された。

対象は、多岐に渡っており、一般病院、リハビリテーション専門病院、精神科病棟、訪問、病児保育に関わる看護師での検討が行われていた。また、中堅看護師という経験年数の範囲を限定して検討を行っているものもあった。

つぎに、尺度開発に関するものが3編だった。佐々木・針生（2006）は、①自尊感情、②連続性、③斉一性、④自己信頼、⑤適応感という5つの下位概念から構成される質問項目を作成し、質問紙調査を通して最終的に20項目から成る看護師の職業的アイデンティティ・スケール尺度（PISN）を開発している。また、内海ら（2017）は、訪問看護師の職業的アイデンティティを高め、質の向上を目指すためには、看護師を対象に開発された尺度ではなく、訪問看護師独自の測定用具の開発が求められるとし、最終的に28項目から成る尺度を開発している。一方で、小池ら（2022）は、職業的アイデンティティ尺度の下位概念を鑑みると共通している概念も多く、各専門職に共通している職業的アイデンティティの概念が存在することが推察されるとし、44項目から成る尺度を開発している。

つぎに、職業的アイデンティティの形成・発達過程に関するものが2編だった。竹内（2008）は、新卒看護師44名を対象に、5年間の縦断的調査にて職業的アイデンティティの形成過程について、質問紙調査を用いて検討している。鈴記・葉久（2015）は、看護管理者（看護師長）11名を対象に、インタビュー調査にて職業的アイデンティティの確立プロセスを明らかにしている。

最後に、職業的アイデンティティ育成のための方策に関するものが1編だった。畑中・伊藤（2018）は、看護観の形成とその実践、実践への他者承認を得るという2回の集合研修と看護実践の3部から構成される教育プログラムを作成し、実施直前、実施直後、実施2ヵ月後での比較を実施している。

2) 作業療法士を対象とした研究動向

作業療法士を対象とした研究では、11編の論文があった。最も古いものは、長谷ら（2001）の報告であり、作業療法誕生の歴史的背景から職業的アイデンティティとの関係性や今後の展望について述べられていた。そのなかで、時間とともに専門職種が広範に活動するにつれて、競合する専門職種が台頭し、作業療法の実践経験の蓄積によっても解決できない問題に直面すると職業的アイデンティティは不安定になり、アイデンティティ・クライシスに陥る可能性を指摘している。一方で、アイデンティティ・クライシスというのは専門職が発達し、包括的で新たな視点を獲得するための転機であると言え、作業療法士の職業的アイデンティティの時間的変化は作業療法職種全体の臨床場面や要求される知識や技術と密接に連動している。よって、作業療法士の職業的アイデンティティは個人にとって静的なものでなく、臨床経験や所有する知識に応じて動的に変化するものであると考えられると述べている。その後、作業療法士の養成教育機関において学生を対象とした論文の発表はみられたが、臨床現場の作業療法士を対象とした研究の報告は長期間みられなかった。

しかし、中本・大嶋（2018）の回復期リハビリテーション病棟で働く作業療法士を対象とした、職業的アイデンティティの分析を筆頭に近年、報告が増大しており、分野としては、精神科（吉田・向 2018；吉田・向 2019）、医療観察法病棟（南ら 2022）での職業的アイデンティティ形成のプロセスや要因を検討するものがあった。

また、尺度の開発に関するものは3編だった。鈴木ら（2019）は、身体障害領域および高齢者領域に勤務する臨床経験1～3年目までの若手作業療法士を対象にアンケート調査を行い、4因子29項目の尺度を開発している。石倉（2020）は、半構造化面接によって抽出されたコードをもとに調査項目を作成し、アンケート調査を実施している。結果として、4因子24項目からなる作業療法士用職業的アイデンティティ尺度を作成している。田

村・曾田（2021）は、他職種等の尺度を参考に25項目の原案を作成し、デルファイ法によって内容的妥当性のある尺度項目案を作成している。デルファイ法とは、任意のテーマについて複数の専門家に個別に質問をし、得られた結果をフィードバックして他の参加者の意見を参照してもらった後、再度同じテーマについて回答してもらうことを繰り返してコンセンサスを得る調査法である。

つぎに、文献調査は2編だった。青山ら（2019）は、職業的アイデンティティと自己効力感に影響する要因について文献検索を実施している。対象となった論文は15件であり、作業療法士を対象としたものが14件、臨床の作業療法士を対象としたものが1件だった。職業的アイデンティティに影響する要因については、アイデンティティ発達に関する心的変化プロセスである、「危機」「（再）体制化」「再生」に沿って、記述内容をカテゴリー分類していた。このなかで、「危機」の要因について、職業的アイデンティティは、経験の少なさや作業療法に関する自己の遂行能力の未成熟さから生じる不安、作業療法という職種に対する曖昧なイメージや個人的アイデンティティの未成熟さなどの曖昧な作業同一性が作業療法に対する未発達な意志へとつながり、さらに同僚や周囲の人との意識や認識のギャップ、教育環境の乏しさ、診療報酬などの環境的障壁の影響と相まって危機を迎えると述べられている。また、石倉（2021）は、近年の作業療法士に求められる社会的期待の拡充あるいは、社会的役割は多様化の一途を辿っているとしたうえで、高い専門性の確立を目指し、専門職化に不可欠とされる職業的アイデンティティに関する研究が求められるところであると述べている。そして、「看護師」、「保健師」、「助産師」、「作業療法士」、「理学療法士」、「言語聴覚士」の職業的アイデンティティ尺度開発に関連する文献検索を行っている。結果として、最終的に10件の論文が抽出され、看護師が7件、保健師1件、助産師1件、作業療法士1件であり、理学療法士と言語聴覚士は0件だった。この件数について、看護

領域における職業的アイデンティティの歴史は古く、1970年代から看護学生を対象に職業的アイデンティティ形成やその発達過程の検討が行われてきたことを確認している。また、看護職（看護師、保健師、助産師）の歴史は、作業療法士の歴史よりも長く、社会と一体化した専門職としての位置づけを獲得していくために、職業的アイデンティティ形成やその発達過程についての議論も早くから進められていたと考えられるとしている。そのうえで、作業療法士の職業的アイデンティティ尺度の開発においては、作業療法士の特徴に適合した、妥当性、信頼性が高い尺度を開発することが求められると述べている。

3) 保健師を対象とした研究動向

保健師を対象とした研究では、6編の論文があった。最も古いものは、根岸ら（2010）の行政保健師の職業的アイデンティティ尺度の開発に関するものだった。そのなかで、時代背景から訪問看護師やケアマネジャーなどの地域を基盤として活動する看護職が増えたために、看護師とは異なる保健師活動のあり方が曖昧になっている点や保健師に求められる専門性は多様であり、保健師の専門性は何かということが長年、能力や資格、教育など様々な視点から議論されてきたとしている。そこで、職業的アイデンティティにゆらぎが生じているのではないかと考え、保健師のみを対象とした職業的アイデンティティ尺度を開発し、信頼性と妥当性の検討を実施している。

その後も、新任保健師を対象としたもの（太田ら 2013；金藤ら 2017）や市町村保健師の経験プロセスと職業的アイデンティティの形成に関するもの（小路ら 2018；小路 2020）があり、研究手法としては半構成的面接による質的記述的研究が増大している傾向にあった。

文献調査は、小路（2021）が地域包括支援センターで働く保健師の職業的アイデンティティに関する調査を行った1編だった。その結果、地域包括保健師の職業意識や活動に対する認識、思考や

行動についての記載がある7文献を保健師の職業的アイデンティティを探索し得る文献として選定していた。そして、記載内容について、「職業意識・役割意識」、「行動・態度」、「価値観」、「専門性・活動への認識」を職業的アイデンティティの構成要素として、これらがどのように示されているかを整理している。

4) ソーシャルワーカーを対象とした研究動向

ソーシャルワーカーを対象とした論文は、2編だった。大谷（2022）は、ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ尺度を開発し、バーンアウト、職業コミットメント、職務満足、離職意識との関連を明らかにすることを目的に質問紙調査を実施している。結果として、3因子18項目から成る尺度が得られ、養成課程のなかで、組織、あるいは専門職団体のなかで、専門職アイデンティティを形成していくことが求められるとしている。また、田中（2022）は、職場外スーパービジョンにおけるスーパーバイザーを初めて担った4名を対象に、専門職アイデンティティ形成に与える影響について、半構造化面接を実施している。その結果として、①実践分野の相違を有効活用した新しい知識の獲得、②バイザーアイデンティティの形成過程で生じるゆらぎの体験、③反省的実践家への自己の移行の3点が専門職アイデンティティ形成に影響を与えていたことが明らかとなったと述べている。

5) 臨床心理士を対象とした研究動向

臨床心理士を対象とした論文は、2編だった。元木（2016）は、独自に作成した臨床心理士の専門職アイデンティティを測定する尺度を用いて、実務経験年数、理想とする人物の有無、特に関心のある専門領域、業務への自信と意欲との関連について、アンケート調査を実施している。その考察として、特に就業初期においてその独自性や専門性を見出しづらい職業であること、熟練者を対象とした研究の必要性が求められることを指摘し

ている。また、近藤（2021）は、臨床心理士が自身の専門性をどのように定義しているのか、また性別、臨床経験年数、雇用形態、プライベートでカウンセリングを受けた経験、スーパービジョンの状況、仕事への不満感といったデモグラフィック要因とどのような関連にあるのかについて調査を実施している。その考察として、デモグラフィック要因が与える影響は臨床経験年数以外ではほとんどないことが示されたが、それは換言すれば、職業的価値観の変化は、主に臨床経験の蓄積によって変化していくということが言えたとしている。

6) ホームヘルパーを対象とした研究動向

ホームヘルパーを対象とした論文は、2編だった。広瀬ら（2018a）は、ホームヘルパーの専門職アイデンティティを測定する尺度を開発し、それに関連する要因をストレスに対する耐性という観点から、困難な状況に対して楽観的な対処ができるといった概念である楽観的態度との関連から明らかにすることを目的に、自記式郵送調査を行っている。考察として、ホームヘルパーは在宅ケアの担い手である他専門職にはない、個別性の高い支援を可能とする専門職性を自覚していることがうかがえると述べている。また、ヘルパー業務によるストレスに対する耐性が備わること、ホームヘルパーが専門職としての独自の存在意義や利用者から認められるという自覚をもつことに寄与すると考えられたとしている。また、同様に広瀬（2018b）は、専門職アイデンティティとネグレクト支援との関連についても調査を実施している。その結果として、ホームヘルパーの専門職アイデンティティや管理職の経験がホームヘルパーのネグレクト支援に関連していることが明らかになったとしている。

7) 介護福祉士を対象とした研究動向

介護福祉士を対象とした論文は、1編のみだった。渡邊（2018）は、主体的に学ぶ6名の介護福

社士を対象に職業的アイデンティティの形成過程について、インタビュー調査を用いて検討を行っている。その考察として、職業的アイデンティティの形成には、隣接領域の資格取得に関連した学びが重要でありながらも、単なる資格取得ではなく“ふりかえり”が契機になっていることが示唆されたと述べている。

8) 助産師を対象とした研究動向

助産師を対象とした論文は、1編のみだった。佐藤・菱谷(2011)は、助産師の職業的アイデンティティを測定する尺度を作成し、関連要因を検討することを目的に、就業2年未満の助産師204名を対象に自記式質問紙調査を行っている。考察として、助産師の職業的アイデンティティは、助産師学生時代と就業後の意識や体験要因、精神的支援、平等志向的な態度によって高められることが示唆されとしている。また、職業継続意志には、助産師の職業的アイデンティティが関連することが示されたと述べている。

9) 養護教諭を対象とした研究動向

養護教諭を対象とした論文は、1編のみだった。波多・笠巻(2019)は、養護教諭の職業的アイデンティティ尺度を使用し、養護教諭の職業的アイデンティティの関連要因について検討することを目的に、アンケート調査を行っている。考察として、養護教諭の職業的アイデンティティの形成・発達には、「養護教諭という仕事に対する充実感・満足感」や職務の動機付け要因である「養護教諭としての知識・技術」、そして仕事の達成感、承認等を実感するための衛生要因である「職場におけるソーシャルサポート」を高めていくこと、また、進路決定時期や進路決定プロセスを考慮したキャリア教育の推進が求められるとしている。

IV 考察

本研究は、医療・保健・福祉領域の職業的アイデンティティについて国内外での年代別及び国内

における各専門職での研究動向について整理を実施した。それらを通じて得た結果を基に、これまでの職業的アイデンティティにおける研究の推移および内容的な方向性や成果として明らかになっていることについて考察し、今後の研究の課題や発展の可能性について述べる。

1. 国内外の職業的アイデンティティ研究における文献数の推移における推察

国外では1950年代より、職業的アイデンティティという言葉がタイトルに含まれる論文が散見された。さらに、1950～1960年代にかけて臨床心理や精神医学、スクールカウンセラーといった職種 of 職業的アイデンティティに関する検討がされており、心理・精神的な分野の職業的アイデンティティを明らかにすることから研究が始まったといえる。そのうえで、1970年代には看護師や保育士の報告が増大し始め、1980年代に入ると学生を対象とした職業的アイデンティティ尺度の開発が進み、1990年代には半構造化インタビューを用いた質的な研究手法が広く用いられるようになっていた。この流れとして、職業的アイデンティティの形成プロセスや構成要素を明らかにするためには、定量的な質問紙等での調査に加えて、より複雑で詳細な現象をとらえることのできる質的研究の報告数が増大したものと考えられる。2000年代に入ると、公衆衛生的な観点からより職域が広まり、地域精神保健看護師や地域ケアにおける専門医の役割の調査が目立つようになっていた。2010年代以降においても文献数はさらに急増しており、多職種連携やチームアプローチを前提としたうえでの、職業的アイデンティティに関する報告が目立っていた。

この背景には、諸外国における多職種協働の様々な取り組みがあるものと思われる。例として、アメリカではPACE (Program of All-inclusive Care for Elderly) と呼ばれる多職種で構成されたチーム (プライマリ医、臨床看護師、ソーシャルワーカー、理学療法士、作業療法士、レクリエー

ショナル・セラピスト、アクティビティ・コーディネーター、在宅ケア・コーディネーター、栄養士などから構成）があり、オランダでも住み慣れた地域で最後まで暮らせるための在宅ケアを担う組織として、ビュートゾルフ（BuutZorg）と呼ばれる看護師、介護士、リハビリスタッフらの多職種チームが活躍している（伊藤 2017）。このように、多職種での相互的な関わりが増大してきたことに伴って、各職種の専門性や在り方を職業的アイデンティティの観点から調査することが求められているのではないかと考える。

一方で、国内においては、波多野・小野寺（1993）が本邦で最初の看護学生および看護婦を対象にしたアイデンティティ尺度を作成している。その後も、看護師研究においては多くの定量的な測定尺度の開発が行われてきている。また、近年では、大谷（2022）が、ソーシャルワーカーの専門職アイデンティティ尺度を開発し、職業コミットメント、職務満足、離職意識との関連を報告しており、保健・福祉領域における職業的アイデンティティ研究も増大してきている。この背景としては国外での報告と同様に、超高齢社会に突入した我が国の各専門職に求められる多様な役割や能力、専門性が関与しているのではないかと考える。長谷ら（2006）は、専門職としての歴史が浅く、専門性が顕在化されない職種が、社会の変化によって対象者が変化する問題を扱う場合には、アイデンティティは不安定になりやすいと述べている。看護師と比較し、その他の各専門職については、法的な制度の観点から考えると歴史が浅いといえる。加えて、近年の社会構造の変化に伴う多様なニーズによって、その他の医療・保健・福祉の各専門職の職業的アイデンティティにゆらぎが生じており、その結果として各分野における職業的アイデンティティを定量的に測定する尺度の開発が増大していると考えられる。

また、その測定尺度を作成するうえで重要となる職種毎での職業的アイデンティティの概念についても各職種の職域拡大に伴って、その構成要素

や形成プロセスを明らかにしようとする報告が増大してきている。金藤（2017）は、保健師は日々進展する保健、医療、福祉、介護等に関する看護職としての専門的な知識及び技術に加え、医療職以外の他機関との連携・調整に係る能力、行政運営や評価に関する行政的能力が必要であるため、職業的アイデンティティを構成する要素はより複雑であると述べ、面接調査を実施している。また、渡邊（2018）も、主体的に学ぶ介護福祉士の職業的アイデンティティの形成過程を明らかにするために、インタビュー調査を実施している。

これらのことから、国内外ともに量的研究のみでは捉えきれない職業的アイデンティティの観点について、質的研究の必要性が求められているといえる。さらに、近年においては多職種協働・連携がより求められており、医療のみならず保健・福祉の専門職も含めた多領域からの職業的アイデンティティに関する報告が増大しているものと考えられる。

2. 職業的アイデンティティ研究における方向性

職業的アイデンティティの概念枠組みとして、グレッグ（2002）は、帰納的方法により看護師が職業的アイデンティティを確立するプロセスを説明するための、初期の領域密着型の中範囲理論を提唱している。これによると、さまざまな人との出会いや「仕事の経験」から「看護の価値を認識」し、「自己の看護感を確立」していく。この3段階を経て、働く新しい経験からの学びの中で看護師は、「自己の看護実践を承認」し、それによって「看護へのコミットメント」を強め、「自己と看護師の統合」に近づいていく。このプロセス全般において、「教育からの影響」が強く関与するとしている。これに基づいて考えると、職業的アイデンティティとは、職業経験を経ることで習得される「理想像」と位置付けることができると考える。そして、その関連要因や構成要素、習得の過程や促進する環境要因、到達の程度を調査した尺度評価などが研究の方向性として明らかにされてきているものと思われる。

一方で、前述したように近年の社会構造の変化に伴う多様なニーズの増大や職域の拡大に伴う環境の変化は、様々な専門職の職業的アイデンティティにゆらぎやアイデンティティ・クライシスをもたらしていると考えられる。岩崎（2016）は病院で働く看護師とは異なり、保健師は行政組織で働く公務員だがその一方で、行政組織の全職員の中で保健師は約2.3%しかおらず数的に少数派であると述べており、小路（2021）は福祉部門や介護部門で働く行政保健師に職業的アイデンティティのゆらぎが顕著に見られることを指摘している。また、吉田・向（2018）、青山ら（2019）の報告では、職業的アイデンティティ形成のプロセスや影響する要因として、危機→再体制化→再生の心的プロセスが挙げられている。この危機の段階では、アイデンティティ・クライシスが生じやすいものと考えられ、その原因としては個人の問題のみならず、部署としての課題も指摘されている。つまり、社会の様々な変化に伴って個人の問題のみならず、多様な部署環境などの要因からみた職業的アイデンティティ研究が求められていると考える。

また、特徴的だった部分として、リハビリテーション3職種（作業療法士、理学療法士、言語聴覚士）については、作業療法分野における近年の報告数は急増していることが明らかとなったが、理学療法や言語聴覚分野での報告に関しては、今回学生を対象としたもの以外では見つけることができなかった。藤井ら（2003）は、元来的に作業療法という職種は、個別性や日常性を重視するため、効果や成果を普遍化しにくいところがあり、固有の技術・技能として認識しにくい特徴から職業的アイデンティティの形成が阻害されやすい側面があるのではないかと指摘している。このような背景もあり、現状として作業療法士の職業的アイデンティティにもゆらぎが生じているのではないかと考える。そのため、地域包括ケアシステムの構築が求められるなかにおいて、根拠に基づく作業療法を展開していくためには、作業療法士自身の専門性を含めた職業的アイデンティティの確

立を図ることが非常に重要になるのではないかと考える。

3. 今後の職業的アイデンティティ研究における課題と発展の可能性

これまでの職業的アイデンティティに関する研究報告では、学生を対象としたものや新人の各専門職を対象にしたもの、また職域の拡大に伴って様々な職場環境で勤務する専門職についての報告が散見された。一方で、職業的アイデンティティとは、個人のアイデンティティが誕生から生涯を通して獲得されると同様に、職業生活におけるさまざまな出来事を通して再構成、再統合され、より確かなものに獲得されていくと考えられるとしている（佐々木・針生 2006）。これは、職業的アイデンティティというものがある時点において完成されるというのではなく、日々の職務内容や職場環境の変化といった出来事によって変容していくことを示唆している。そのため、今後は職場内での部署移動や違う職場への移動などに伴って職業的アイデンティティがどのように変容していくかを明らかにする研究が求められるものと思われる。

文献

- Adams K, Hean S, et al (2006) : *Investigating the factors influencing professional identity of first year health and social care students*, *Learn Health Soc Care*5, 55-68.
- Bertin G, Pantalone M. (2019) . *Professional identity in community care: The case of specialist physicians in outpatient services in Italy*. *Social science & medicine* (1982) , 226, 21-28.
- Best, S., & Williams, S. (2019) . *Professional identity in interprofessional teams: findings from a scoping review*. *Journal of interprofessional care*, 33(2), 170-181.
- Crawford, P., Brown, B., & Majomi, P. (2008) . *Professional identity in community*

- mental health nursing: a thematic analysis*. *International journal of nursing studies*, 45 (7), 1055-1063.
- Ekstein R, Mayman M. (1957) : *On the professional identity of the clinical Psychologist*. *Bull Menninger Clin*. 21 (2) : 59-61.
- Erik H. Erikson (1959) *Identity and the Life Cycle. Psychological Issues*. (=2011. 西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房.)
- Erik H. Erikson (1968) *Identity: Youth and Crisis*. (=2017. 中島由恵訳『アイデンティティ－青年と危機－』新曜社.)
- 藤井恭子, 野々村典子, 鈴木純恵ほか (2003) : 「医療系学生における職業的アイデンティティの分析」『茨城県立医療大学紀要』7, 131-142.
- グレッグ美鈴 (2000) : 「看護における1重要概念としての看護婦の職業的アイデンティティ」『Quality Nursing』6 (10), 873-878.
- グレッグ美鈴 (2002) : 「看護師の職業的アイデンティティに関する中範囲理論の構築」『看護研究』35 (3), 2-10.
- 石倉健一 (2021) : 「日本における医療職の職業的アイデンティティ尺度開発のための研究の動向と課題」『日本作業療法研究学会誌』24 (1), 39-46.
- 伊藤めぐみ (2017) : 「日本における地域包括ケアシステム構築に関する一考察－諸外国の事例を踏まえて－」『四条畷学園大学紀要』50, 74-80.
- 児玉真樹子, 深田博己 (2005) : 「企業就業者の職業的アイデンティティの危機に関する研究」『広島大学大学院教育研究科紀要第三部』54, 265-273.
- Levanon-Erez, N., Cohen, M., Traub Bar-Ilan, R., & Maeir, A. (2017). *Occupational identity of adolescents with ADHD: A mixed methods study*. *Scandinavian journal of occupational therapy*, 24 (1), 32-40.
- 宮下一博, 田辺敏明, 小柳晴生・他, 鑓幹八郎・他 (共編) (1984) : 「アイデンティティ研究の展望 I」『ナカニシヤ出版』, 154-166.
- Mak, S., Hunt, M., Boruff, J., Zaccagnini, M., & Thomas, A. (2022). *Exploring professional identity in rehabilitation professions: a scoping review*. *Advances in health sciences education : theory and practice*, 27(3), 793-815.
- Martin-Saez, M. M., & James, N. (2021). *The experience of occupational identity disruption post stroke: a systematic review and meta-ethnography*. *Disability and rehabilitation*, 43(8), 1044-1055.
- Mosey, A. C. (1985) : *Eleanor Clarke Slagle lecture, 1985: a monistic or a pluralistic approach to professional identity?*. *The American Journal of Occupational Therapy*, 39 (8), 504-509.
- Melgosa J. (1987). *Development and validation of the occupational identity scale*. *Journal of adolescence*, 10(4), 385-397.
- Miles-Tapping, C., Rennie, G. A., Duffy, M., Rooke, L., & Holstein, S. (1992). *Canadian physiotherapists' professional identity: an exploratory survey*. *Physiotherapy Canada. Physiotherapie Canada*, 44(4), 31-35.
- Noble, C., McKauge, L., & Clavarino, A. (2019). *Pharmacy student professional identity formation: a scoping review*. *Integrated pharmacy research & practice*, 8, 15-34.
- Rosen J. (1968). *School counselor dogmatism and vocational identity*. *Psychological reports*, 23(1), 24-26.
- 柴田久美子 (2004) : 「職業的アイデンティティ理論に関する考察－理論の系譜と研究の課題－」『明星大学社会学研究紀要』24, 23-29.
- Walder, K., Bissett, M., Molineux, M., & Whiteford, G. (2022). *Understanding professional identity in occupational therapy: A scoping review*. *Scandinavian journal of occupational therapy*, 29 (3), 175-197.

